

# 心理学における操作的定義

太田陽 (Akira OTA)

名古屋大学大学院情報科学研究科博士課程

心理学では研究対象の概念を実験操作の手続きによって定義する操作的定義がひろく用いられている。例えば、ある操作的定義によれば、個人の「知能」とは特定のIQテストの得点であるとされる。このような定義にふくまれる手続きに従うことで複数の研究者が共通の対象を研究することが可能になるとされ、操作的定義は研究の蓄積的な進歩を実現する方法として心理学で受け入れられてきた。しかし、同時に操作的定義は哲学者・心理学者双方から厳しく批判されてきた。とくに批判の対象となってきたのは、操作的定義の採用によって測定操作の妥当性（その操作が意図した概念を測定できているのか）を有意味に問えなくなることである。操作的定義の批判者は、概念の意味が操作手続きによって尽くされるとすると、どんな測定操作もそれが定義する概念を正しく測定していることとなり、測定の妥当性を問えなくなる（知能がIQテストの得点ならばそのIQテストは常に知能の測定に成功していることになる）と主張する。他方で、近年、科学的実験の実践に注目する実験の哲学の議論では、操作的定義の認識的役割が見直されている。そのような議論では、研究対象の現象についての理論や概念がいまだ確立されていない未成熟な研究領域での「探索的な」実験において、操作的定義が理論構築・概念形成のためのツールとして役に立つという主張がなされる。本発表では近年の実験の哲学における議論を踏まえて心理学における操作的定義の意義と測定の妥当性の問題を検討する。